

# 明治・大正・昭和の戦中戦後の初等音楽教育について

—わらべ歌・童謡・唱歌を中心に—

江川 靖志

## Elementary Music Education in the Meiji, Taisho, and Showa Periods during and after World War II —Focus on children's songs—

Yasushi Egawa

### Abstract

A year has passed with no end in sight to the war between Ukraine and Russia, and people are still forced to live hard lives in the midst of the war. There are people who are injured or even killed by war. This is no exception, even for small children. For those of us who have never experienced war, we do not know the true suffering of war. I would also like to research how it has been transformed and made into what it is today, and pass on my own perception of peace and that of the students who will become educators in the future.

**Keywords:** music history, children's songs, music education

### 1. はじめに

ウクライナとロシアの戦争は終わりの見えないまま1年が過ぎ、現在もその中で苦しい生活を余儀なくされている人々がいる。世界中で戦争は絶えることなく、戦争によって怪我や、命を落とす人がいる。それは老若男女関係なく、小さな子どもでも例外ではない。世界が情報でつながっている現在、戦争で起こっている現状を身近に知ることはできる。しかし戦争の経験のない私たちにとっては書籍、テレビ、インターネットの情報のみで戦争の本当の苦しみはわからない。このような現実の中で音楽を専門とする教師として、日本が戦争をしていた頃の音楽教育がどのようなものであったか、子どもへの教育として歌がどのように扱われてきたのか、またそれがどのような変革を遂げて現在のものとなっているのか研究していきたい。今回は日本が近代国家を目指し、教育改革を行った明治5年学制から第2次世界大戦後の教育がどのように変わっていったかわらべ歌・童謡・唱歌を

中心に研究し、自身の平和認識と、これから教育者を目指す学生に伝えていきたいと考える。

## 2. 子どもの歌の歴史

子どもの歌の歴史について、古くから伝承され継承されてきた「わらべ歌」は地域特有のものなど生活の中で生まれ、受け継がれてきた特徴を持つ。また芸術歌曲として日本の詩人、作曲家が子どもたちへの芸術の贈り物として発展させてきた「童謡」。音楽教育の歴史を知る上で重要な手掛かりとなる「唱歌」。この大きく3つに分けられる子どもの歌の歴史について述べたい。

### ①わらべ歌

わらべ歌は、子どもたちの日常生活や遊びのなかで自然に口伝えされ、伝承されてきた歌のことで、伝承童謡、又は自然童謡とも呼ばれている。分類では民謡も含まれており、つまりは様々な土地で、口伝、又は自然発生のよう形で生まれたわらべ歌はその発生の土地、作られた年などわかっていないものものがほとんどである。人々の生活に根付いたものであった。

ここで述べる童謡は②で述べる近代に活発に作られた創作童謡とは違うこと理解しておかねばならない。日本にはわらべ歌が数百種類以上あると言われており、今でも歌い継がれている。主に絵かき歌、数え歌、遊び歌などが主な種類となる。わらべ歌の歴史は古く、古代にまでさかのぼる。古代、童歌は「わざうた」と呼ばれ、世の中に起こることを歌で予言するものという扱いでもあり、神からのお告げを、神の使いである子どもが歌うと捉えられていた。

わらべ歌に関する資料で古いものは、平安時代までさかのぼり、室町時代、そして長い江戸時代、明治初期へと発展を続ける。江戸時代後期わらべ歌を集めた歌集が各地方でも作られるようになった。そして特筆すべきなのは北原白秋が仲間と作った「日本伝承童謡集成」である。各地方からわらべ歌を採集し、昭和22年～昭和25年に発表された。

### ②童謡

ここでいう童謡とは創作童謡のことを言う。創作童謡とは大正時代に盛んに創作され、子どもたちにも芸術性の高い音楽に触れさせることを目的として、子どもが歌うことを想定した文学作品に、曲をつけられた歌曲のことである。大正7(1918)年、小説家であり、児童文学者でもある鈴木三重吉が、子どもたちのための読物とともに、子どもたちのための歌として童謡が数多く掲載されていく児童雑誌「赤い鳥」を創刊し、その中では日本を代表する作曲家たちが多く童謡を発表している。成田為三 作曲、西条八十 作詩の「かなりや」は最初の創作童謡に位置付けられ、昭和22(1947)年、国定教科書に採用された際には題名

が「歌を忘れたカナリヤ」と改められ、「唱歌」となった。その後、昭和 35(1960)年まで、5 年生の教科書を中心に掲載された。北原白秋・西条八十・野口雨情らの詩を提供し、成田為三・山田耕筰・中山晋平らの作曲家たちが曲をつけ、子どもたちの親しめる歌を多く残している。北原白秋は唱歌への批判として 1929 年の論集「緑の触角」では童謡復興という項目では、明治以来の学校唱歌の選定は根本から間違っていること、子どものことを理解しておらず、在来の童謡を軽んじてきたことを批判している。当時を代表する詩人、文学者、作曲家、演奏家などを巻き込んだ鈴木三重吉は、子どもの目線に立ち、子どもの楽しめる童謡・児童文学を理想としていた。鈴木三重吉の童謡・児童文学運動が盛んになったことにより、「赤い鳥」の後に続いて「金の舟」「コドモノクニ」など多くの児童文学雑誌が創刊され、優れた童話作家、童謡作家、童謡作曲家、童画家らも誕生することになる。子どもの文化の発展、及び教育運動として教育界にも大きな影響を与えた。「赤い鳥」などの活動は近代児童文学・児童音楽に最も重要な影響を与えたとされ、鈴木三重吉は日本の児童文化運動の父と呼ばれている。

### ③唱歌

唱歌とは、明治維新後、小中学校の教育のために作られた作品のことである。明治政府が近代国家形成のために教育の充実を図り、明治 5(1872)年に学制を發布した。これにより音楽の授業、及び音楽の教科書のことも唱歌と呼び、学校教育としての位置づけがなされたが、学制の發布された当時は資料、教科書、人材ともに十分ではなく、実際には音楽の授業はなされていなかった。また教育の充実とはいえ、政治色の強い教育内容となり、唱歌においては日本の風景、風俗、訓話などを歌ったものが多く、民族性、天皇賛美、軍歌などが数多く採用されることとなる。そして明治から唱歌の授業で歌われ続けてきたものが戦後の教科書にも残り、「文部省唱歌」として今もなお大切に歌われている。明治 43(1910)年、文部省唱歌集として「小学唱歌集初編」「小学唱歌集第二編」「小学唱歌集第三編」が創刊され、日本政府が作った初の音楽の教科書となった。その初の教科書「小学唱歌集初編」に採用された 3 曲は日本語の歌詞ではあるものの、「見わたせば」(フランスの哲学者ルソーの作曲)、「蛍の光」(スコットランド民謡)、「蝶々」(スペイン民謡)の旋律を用いたものであり、日本人による詩と、旋律の歌は採用されていなかった。その後、民間による「明治唱歌」(1888)、「幼稚園唱歌」(1901)、また東京音楽学校により編纂された「中等唱歌集」(1889)、「中学唱歌」(1901)等が刊行され、明治 44(1911)年には作詞作曲ともに日本人による官製の教科書「尋常小学校唱歌」が刊行された。唱歌は明治政府にとって近代日本を形成する手段として用いられた。日本を一つの国として諸外国と渡り合う国家を目指したのである。そのため音楽を用いて国民性、道徳性などの日本人たる素養を植え付けることを手段としていた。よって政府は学校教育として唱歌を薦める一方、わらべ歌や、童謡は教育的に好ましくないものとして国民へのメッセージとしていた。それに疑問を持ったのが②童謡で登場した鈴木八重吉であった。子どもにも芸術性の高い童謡を、日本の詩人、

作曲家による創作童謡の運動へと展開されていく。また唱歌の授業は世相の影響を反映したものであり、戦前戦中には軍事的思想の教育を目的に利用され、戦後には GHQ の指導により戦争肯定する歌は削除され、昭和 33(1958)年の文部省による学習指導要領において歌唱共通教材制度が導入され、「ふるさと」「朧月夜」「村祭り」などの日本人の心や、美しい風景を歌ったものが愛唱歌として残っている。

### 3. 日本の第二次世界大戦への歩み、及び明治 5(1872)年学制以降第 2 次世界大戦後までの初等音楽教育の歩み

子どもへの音楽教育の歴史を知るためには、戦争のことも知らなければならぬ。ここでは年表として第二次世界大戦の経過についてと、また初等教育の経過について年表を記す。

#### 明治 5(1872)年学制以降第 2 次世界大戦後までの初等音楽教育の歩み

年月日	出来事
明治 5(1872)年	日本初の近代的学校制度「学制」の発布。 授業科目として現代の授業にあたる「唱歌」の誕生。
明治 12(1879)年	文部省所属の音楽教育研究機関「音楽取調掛」の創設。 ※東京師範学校校長でもあった伊沢修二、神津専三郎がその任を務め、明治 13(1880)年 L.W.メーソンを日本に招聘。
明治 15(1882)年 明治 16(1883)年 明治 17(1884)年	日本初の官製の音楽の教科書「小学校唱歌集」初編の発表。 「小学校唱歌集」第二編の発表。 「小学校唱歌集」第三編の発表。 ※「小学校唱歌集」は掲載曲の多くは外国の歌の旋律に日本語の歌詞をつけたものだった。
明治 20(1887)年	東京音楽学校（旧音楽取調掛）を創立。
明治 21(1888)年から 明治 23(1890)年にかけて	民間で作られた教科書で大和田健樹・奥好義編の「明治唱歌」（計六冊）の刊行。
明治 22(1889)年から 明治 34(1901)年にかけて	東京音楽学校による「埴生の宿」を含む「中等唱歌集」（1889）、「箱根八里」「荒城の月」を含む「中学唱歌」（1901）などが編纂される。

<p>明治 23(1890)年</p>	<p>「教育勅語」により教科用図書の統一が進み、同年「小学校令」により教室の設備としてオルガン、講堂にはピアノが設置される。</p>
<p>明治 24(1891)年</p>	<p>「小学校教則大綱」により唱歌について初めての指導目的、及び内容が示された。</p>
<p>明治 34(1901)年</p>	<p>「お正月」などを掲載した民間の教科書、共益商社編「幼稚園唱歌」刊行。</p>
<p>明治 44 年(1911)年から大正 14(1925)年にかけて</p>	<p>歌詞も旋律もすべて日本人の手によって作られた官製の「尋常小学唱歌」(全六冊)の刊行。  ※学年ごとに分冊し、「かたつむり」「鳩」など低学年向けのものから、「朧月夜」「故郷」「冬景色」など上級生用まで、現在も歌い継がれている唱歌が多く含まれている。</p>
<p>大正 7(1918)年 7 月</p>	<p>鈴木三重吉らによる童謡雑誌「赤い鳥」創刊。  ※国民づくりのツールとしての唱歌ではなく、真価のある純麗な童謡を子どもたちに届けることをスローガンとした童謡運動。</p>
<p>昭和 7(1932)年</p>	<p>文部省著作「新訂尋常小学校唱歌」の刊行。  ※「尋常小学唱歌」の改訂。増補版。</p>
<p>昭和 16(1941)年</p>	<p>「国民学校令」の公布により音楽科が義務教育の国語、算数などと並ぶ学科として位置づけられ、芸能科音楽という名称となった。  国民学校の国定教科書の出版。  「ウタノホン・上」(昭和 16 年 3 月)  「うたのほん・下」(昭和 16 年 3 月)  「初等科音楽一～四」(昭和 17 年 3 月～昭和 18 年 3 月)  男子用「高等科音楽・一」(昭和 19 年 4 月)  女子用の「高等科音楽・一」(昭和 19 年 4 月)  ※授業の指導内容に鋭敏な聴覚の育成を目標にした訓練が取り入れられ、聴音の訓練により、敵飛行機の音を聞き分けることを目標とされた。教科書の内容も軍歌などの戦争を題材に</p>



「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」「ふしぎなポケット」など子どもの歌の詩人としては欠かせない存在のまどみちお氏である。「ぞうさん」には戦後の希望と、戦時下における動物たちの殺処分のエピソードが潜んでいる。

戦後の希望というのは、1949年インドから1頭のメスのゾウが東京の上野動物園へ贈られた。

戦時下における動物たちの殺処分に関して、1943年戦争の激化とともに、物資の不足による食糧難となる。それは動物も同様である。また敵軍の東京や、各地への空襲により動物園の檻が壊された時のことも考えて、動物園には殺処分の命令が下った。

まどみちお氏も、作曲の團伊玖磨氏も、戦後の日本に新たなゾウが寄贈されたとき、平和の訪れを感じ、この「ぞうさん」という作品が生まれた。

②「ウミ」 林 柳波 作詩 井上 武士 作曲

三	二	一	ウミ
海にお船を浮かばして	海は大波 青い波	海は広いな 大きな	
行ってみたいなよそのくに	ゆれてどこまで 続くやら	月がのぼるし 日が沈む	
			井上 武士 作曲
			林 柳波 作詩

発表は昭和 16(1941)年発行の国定教科書「ウタノホン」1年生用である。そして現在も小学 1 年生の歌唱共通教材として広く歌われている作品である。発表の昭和 16 年は戦争の真っ只中で、発表当時この歌の解釈として軍国主義の思想が色濃く反映されたとも言われている。それは曲中の「お船」は「軍艦」を差し、「よそのくに」は「他国への侵略」として指導が行われていた。ただ林柳波は当時様々な制約の中で、どのような言葉で語りかければ子どもたちに届くのか、心を開かせられるかを常に考えていたという。戦争の中でも素直な子ども目線を持っていたのである。

③「われは海の子」 作詩・作曲者 不詳

われは海の子

作詩・作曲 不詳

- 一 我は海の子 白浪の  
騒ぐ磯辺の 松原に  
煙たなびく 苫屋こそ  
我が懐かしき 住家なれ
- 二 生れて潮に 浴して  
浪を子守の 歌と聞き  
千里寄せくる 海の気を  
吸いて童と なりにけり
- 三 高く鼻つく 磯の香に  
不断の花の 薫りあり  
渚の松に 吹く風を  
いみじき楽と 我は聞く
- 四 丈余の櫓じょうよ 操りて  
行手定めぬ 浪まくら  
百尋千尋ももひろちひろ 海の底  
遊びなれたる 庭広し
- 五 幾年いくとせここに 鍛えたる  
鉄より堅き 腕あり  
吹く塩風に 黒みたる  
肌は赤銅しゃくどう さながらに
- 六 浪に漂う 氷山も  
来らば来れ 恐れんや  
海まき上ぐる 竜巻も  
起らば起れ 驚かじ
- 七 いで大船に 乗出して  
我は拾わん 海の富  
いで軍艦に 乗組みて  
我は護らん 海の国

この歌は明治 43(1910)年「尋常小学読本唱歌」に掲載され、もともとは国語の教科書「尋常小学読本」に掲載された詩に、旋律をつけた文部省による唱歌集の中の曲である。小学 6 年生の教材として、子どもたちの愛唱歌であった。1 番～7 番まであり、漁村で育った少年が、海の下で成長し、勇敢な若者となって、大きな船に乗り込み、いざとなれば戦い国を守るという内容である。海の国とは、四方を海に囲まれた日本のことで、子どもたちはこの歌を歌い、自分の国を守る、いざとなったら軍艦とも戦うという思想を教育によって植え付けられてきたのだ。

終戦後 GHQ の指導により、軍国主義に関わる歌は排除しなければならなかった。終戦後の戦争を思わせる箇所を黒塗りにした教科書においては 7 番を削除、昭和 22(1947)年から使用の文部省が内容を一新した「文部省著作教科書」では「われは海の子」の曲自体が削除された。しかし昭和 33(1958)年、文部省の歌唱共通教材の導入により「われは海の子」は採用されることとなった。しかし歌詞は 3 番までという最終的には 4～7 番まで削除され、現在に至っている。

④「里の秋」 斎藤 信夫 作詩 海沼 實 作曲

里の秋

斎藤 信夫 作詩  
海沼 實 作曲

一 しずかな しずかな 里の秋

お背戸せとに木の実の 落ちる夜は

ああ 母さんと ただ二人  
栗の実煮てます いろりばた

二 明るい 明るい 星の空

鳴き鳴き夜鴨よがもの 渡る夜は

ああ 父さんの あの笑顔  
栗の実食べては 思い出す

三 さよなら さよなら 椰子やしの島

お船にゆられて 帰られる  
ああ 父さんよ ご無事でと  
今夜も母さんと 祈ります

星月夜

斎藤 信夫 作詩  
海沼 實 作曲

一 しずかな しずかな 里の秋

お背戸せとに木の実の 落ちる夜は

ああ かあさんと ただ二人  
栗の実煮てます いろりばた

二 明るい 明るい 星の空

鳴き鳴き夜鴨よがもの 渡る夜は

ああ 父さんの あの笑顔  
栗の実食べては 思い出す

三 きれいな きれいな 椰子やしの島

しっかり守って くださいと  
ああ とうさんの ご武運を  
今夜も一人で 祈ります

四

大きく 大きく なったなら  
兵隊さんだよ うれしいな  
ねえ 母さんよ 僕だって  
かならずお国を まもります

自身のコンサートでもしばしば演奏する親しみのある曲であったが、様々な局面を越え、現在の作品となっていることがわかった。

童謡「里の秋」が初めて世に出たのは昭和 20(1945)年、終戦の年の 12 月 24 日で。初めて南方から兵士が帰還するお祝いに NHK の特別ラジオ番組のために作曲された。「里の秋」が 3 番までだが、この歌には発表されなかった「星月夜」という 4 番までの歌詞が存在した。「里の秋」が発表される前、昭和 16(1941)年に書かれた同じく斎藤信夫の詩で、軍国主義の様相が色濃く、お父さんの無事ではなく武運を、兵隊になることを夢見る子どもの姿が描かれている。しかしこの内容では GHQ の放送許可は下りない為、名前も「星月夜」から「里の秋」、歌詞も 4 番は削除、3 番は書き換えて、現在の 3 番までの作品になったのである。3 番の詩の中にある「ああ父さんよご無事でと」も、戦時下では言えなかったであろう内容である。戦争で戦って死ぬことが名誉とされていた中で、生きて帰ることを願う言葉を歌うことができる喜びは大きかったと考える。それらを経て昭和 20 年 12 月 24 日「里の秋」は放送され、大反響となった。

「里の秋」が季節に思いを馳せる曲で留まってはならない。この曲には命の尊さ、平和であることの大切さが詰まっている作品である。

## 5. おわりに

今回、音楽教育の歴史について研究し、当時の政治家、教育家、音楽家たちの創り上げてきたものを知ることができた。それは過去の歴史を知ることにより、未来への手がかりが見えてくるのではないかと考える。明治5年の学制から、昭和の第二次世界大戦の終わりまでの研究だったが、近代国家を形成するため、教育の充実が不可欠であったこと、音楽教育を用いて情操教育だけでなく、日本国民としての素養を育成する教育がなされていたことがわかった。その結果、日本が戦争に舵を切ったことで、音楽教育だけでなく教育の役割が、戦争肯定の思想を植え付けるために行われていたということも伺える。

最初にも書いた過去を知ることにより、未来への手がかりが見えてくるということは、つまり過去の戦争の過ちを知ることによって、平和な世界を目指すべき手だてを見い出せることができるのではないだろうか。音楽教育が政治や思想の植え付けに利用されることなく、心を育むものであるべきだと考える。私は音楽教師として、改めてこれから教育者になることを目指す学生にこれらのことを伝えていきたい。

## 参考文献

- 喜多由浩（2020）『消された唱歌の謎を解く』産経新聞社出版  
合田道人（2005）『本当は戦争の歌だった 童謡の謎』祥伝社  
井手口彰典（2018）『童謡の百年 なぜ「心のふるさと」になったのか』筑摩書房  
中野敏男（2012）『詩歌と戦争 白秋と民衆、総戦力への「道」』NHK 出版  
服部公一（2015）『童謡はどこへ消えた 子どもたちの音楽手帖』平凡社  
周東美材（2015）『童謡の近代 メディア変容と子ども文化』岩波書店  
伝承遊びを伝える会（2022）『歌あそび SING AND PLAY』文溪堂  
松村直行（2011）『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ—明治・大正・昭和初中期』和泉書院